2025年度　非認知能力向上事業　検証会議要旨

【ファシリテーターから】★子どもの様子　☆アドバイス　　〇先生方の学び

★１・２年生合同で行った演劇ＷＳでは、リードする２年生や２年生をお手本にしてやり抜く１年生、逆に１年生の動きに触発された２年生の姿もあった。

★大人に頼らず、自分の力で何とかしようとする姿勢が見られた。

★人への興味が育っている子どもが多く見られた。

★観る力が育っている子どもが多く見られた。（自分の経験が投影されている）

☆観察することが大前提。観察してからどのような関わりが必要か判断する、そして見落とさない。

☆原則、子どもたちのやりたいことに制御をかけない。

☆声かけをする際、心がけていることは、「子どもがもっているであろうイメージについて、具体的かつイメージが拡がるような声かけをする」。

☆思ったこと、感じたことは、その場で伝える。例：「私には～のように見えた」など。

☆「やり抜く力」について大切なことは、子どもの言動に価値づけをする。やりたくない選択も受け入れる。「自制心」について大切なことは、まずは褒める。「協働性」について大切なことは、発言しやすい環境をつくる。つぶやきをひろう。

☆大人が先回りして動いてしまうことで、子どもたちがアイデアを引っ込めたり、能動性を失ったりする状況をつくらない。

☆子どもたちと関わる際、常に「自分が楽しむこと」を大切にしている。

【管理職・担当教員から】

★演劇ＷＳが終わってからも、楽しみ会等で実施している。

〇国語の授業で動作化している。実際に動いてみることで他者理解につながっていると感じる。

〇子どもたちの言動について、価値づけを意識している。「やってみよう」という態度につながっている。

〇グループ分けについて、様々なパターンを試みることで、意見のしやすい状況について学べた。

〇夢中になっている様子を第三者として観察できたが、「その言動の背景」を観ることを意識した。

〇「手を出しすぎない」ことが今年度の目標だった。

〇能動的になる仕掛けの工夫についてのヒントが多い。子どもに考えさせて、判断し行動につなげる。まさに普段の授業と同じ。一人一人の言動を拾うことで、様々な状況をフラットにしていると感じた。

〇文化庁事業で、３～６年生に実施した。実施については、肯定的な意見がほぼ１００％だった。「前より堂々と動けるようになったり、自分から話しかけられるようになったりしました」との感想があり、個人もそうだが、学校全体が変わった思いをした。

【学識者から】

☆**「観る力」**を鍛える視点として、「一律にする欲望に抗う力」が大切となる。客観的、タイミング、関係性、特性等、その子どものもつ「氷山の下にあるものを観ること」。だから、常に子どもの様子を観察する意識が求められる。また、一人の教員だけでなく、学校の教員がバラバラでは成り立たない。

☆**「振り返る力」**は、協働的な支援につながる。演劇ＷＳの中で、感想を言う場面があるが、回を重ねるごとに子どもたちが単なる「おもしろかった」とかではなく、「想像して感想を述べたり、または価値付けして述べたりする」子どもが増えてきた。ファシリテーター（大人）の動きが子どもたちに転移している。

☆**「集団としての非認知能力の高まり」**について、子どもがファシリテーターとして取り組む様子が見られた学校や、テーマを「変身学校」として、学校という場で自分たちは「変身できる＝成長できる」ことを自分たちなりに表現した学校もあった。